:DarkSide

目次

My lovely son in my drawings　とりさん・・・2
お礼参り　廉・・・14
黒い雪、白い雪　ICE・・・28
あとがき・・・39

SAMPLE

My lovely son in my drawings より抜粋

とりさん

私が何故、このような記録を残そうとしているのか。私の罪と、親子の恐ろしい運命を、書き残そうとしているのか。今の私には、きちんとした合理的な説明はできそうにありません。ただ、心のどこかで、いつまでも続くはずのない今の生活の、破局の予感を感じ取り、そこに至るまでの私と我が子の夢のような、あるいは悪夢のような運命と、私の思いを、誰かに理解して欲しい、そう願っているのかもしれません。

十数年も前のこと、私は、三十を過ぎても食えない画家のなり損ねでありました。出入りしていた出身の美大で、美希という女性と親しくなり、数ヶ月の同棲の末、結婚しました。それは、人も羨む幸福な結婚でありました。何故なら美希は、類い希なる美貌の持ち主であり、物静かで温かい女性であり、また著名な美術評論家の娘でもあったからなのです。

結婚後一年に満たず、美希は妊娠し、男の子を出産しました。ところが、大変な難産の末、美希は出産後一度も意識を取り戻すことなく、夭折してしまったのです。

絶望に打ちひしがれた私は、残された男児に、望みを託し、「美希」から一字をとって、また「希望」の意味を込めて、希（のぞみ）と名付けたのです。

男一人で赤子を育てるなど、並大抵のことではありません。幼い頃は、美希の両親が希の面倒を見てくれました。美希の忘れ形見、美希の面影を残す希を、夫妻は溺愛し、育ててくれました。また、美術評論家である美希の父のおかげもあり、私も、次第に一人の画家として、それなりの地位を得ることができるようになっていったのであります。

その美希の父母が、相次いで亡くなったのが、希が五歳の時でした。父親は癌で、母親は夫の死のショックから寝たきりになってしまい、半年も経たないうちに衰弱して亡くなりました。そして私と希の二人

SAMPLE

きりの生活が、始まったのです。
　幼時の希は、母親に似て大人しい子でしたが、私にしがみつき、じゃれついて離れないほど、私に懐いておりました。私は、しばしば彼を、絵に描きました。近頃の父親は、ビデオカメラやデジカメで息子の成長を撮ることを好むようですが、私の希の成長は、私の筆で、白いカンバスや画用紙の上に、残されていったのです。裸の絵も多く残されています。幼時にそれに抵抗のあるはずもなく、小学校の中学年くらいになっても、もはや彼をモデルに絵を描くことは習慣化されていましたから、裸になることに抵抗を示すことはありませんでした。自分の描かれた絵を見て、
「本物の僕は、こんなにきれいじゃない」
と、はにかむように言った彼は、あの頃小三だったでしょうか。

（中略）

さて、私は少なからず動揺を抱きながら、希の部屋をノックしました。
「希、一度ゆっくり話そう」
返事がありません。
「今日はお父さんも退かない。ずっとこうしてるわけにもいかないじゃないか。ドアをぶち破ってでも、部屋に入るよ」
　いつにない言葉の激しさです。そう言えば、希を大声で叱ったことなど一度もありませんでした。希は、ドアを開け、そのまま部屋の中に引っ込みます。私は部屋に入りました。カーテンを閉め切り、電灯も点けていない薄暗い部屋に、です。
　ベッドに腰掛けた希の隣に、私は腰掛けました。
「希、さびしいかも知れないけど」
　私は、希の肩を抱くようにして、囁いたのです。少年の甘い匂いがしました。
「どうしたって、お母さんは帰ってこない」

SAMPLE

沈黙。そして、その沈黙を破ったのは、驚くべく、希の、くぐもった「笑い声」だったのです。
く、くく、く……
「！……希……」
「どうして僕がお母さんがいなくてさびしいと思うの？　一度も会ったこともない、写真でしか見たことのないお母さんが」
初めて聞く、希の激しく震える声。これは、「怒り」なのでしょうか……？
「僕が知らないとでも思ってるの？　お父さんは、僕が憎いんだ。この世で一番愛していた人を殺した僕が！」
「希……。それは……」
違う。と言えなかったのです。私は……
「お父さんは、いつも僕を見ていなかった。僕の、お母さんに似ているところだけ見ていた。十年も前に死んでしまった妻を、僕の中に見ていただけなんだ！」
「希ィ……！」
私の中で何かが壊れました。私は叫び、ベッドの上で希に馬乗りになって、彼の華奢な身体を押さえつけ、両手でか細い首を、ぐいぐいと絞めたのです。
「お父さん……」
苦しみに喘ぎながら、希は、切れ切れに私に言葉をかけるのです。
「僕を殺したら……お母さんが消えてしまうよ……お父さんの大切な……」
私は、首を絞める手を緩めました。
「消しはしない。消すもんか。美希を甦らせる魔法を……」
欠乏した酸素を補うために、ゼイゼイと激しく息をする希の瞳の奥に、暗くて深いさびしさと同時に、私への憐れみが宿るのを、私は見たのです。
「これが、魔法だ……！」
私は、希のオレンジの格子縞の寝間着の上に手をかけました。ボタンが全部飛んで、青白く滑らかな胸

SAMPLE

が露わになりました。破り取るようにその寝間着の上をはぎ取り、下履きに手をかけ、パンツと一緒に希の全ての着衣を奪い取ったのです。青い果実、青白く華奢な、妖艶な肉体。私は生まれて初めて、少年の肉体に欲情したのです。いや、初めて、その欲情を、「自覚」したと言うべきかもしれません。

私の行動を、思春期の戸口に立ったばかりの希に、理解できるはずがありましょうか。私への憐れみさえ感じさせた瞳には、今や恐怖が宿っておりました。私は希の両足を抱え上げ、肩にかつぐと、自分の下履きを下ろし、いきり立つ大人の性器を、希に見せつけたのです。そのまま、彼に覆い被さり、私は、実の息子の唇を奪ったのであります。

「お、お父……さん」

希の瞳に涙が、そして唇を拭う手は震えておりました。

（中略）

衝撃から気力を失い、全裸のままベッドに横たわる希を後にして部屋に出る前、ちらりと振り返りました。傷つき精も根も絶え果てていても、天使のごとき美しさ。それは美希の美をも凌いでいると、私は感じたのです。この世に存在しないかに思われた、美希よりも美しい天使がそこにいたのでした。私は、それを、穢したのです。

SAMPLE